

北海道立北方民族博物館所蔵の寺田弘氏収集資料について : 収集までの経緯と主なアイヌ民族資料

著者	齋藤 玲子
雑誌名	北海道立北方民族博物館研究紀要
巻	16
ページ	99-104
発行年	2007-03-22
URL	http://hdl.handle.net/10502/5617

<資料紹介>

北海道立北方民族博物館所蔵の寺田弘氏収集資料について —収蔵までの経緯と主なアイヌ民族資料—

齋 藤 玲 子*

A Report about the TERADA Collection of Ainu artifacts

Reiko SARTO

This is a report about the collection which Mr. Hiroshi TERADA had purchased and has been stored in the Hokkaido Museum of Northern Peoples. This collection is composed of Ainu artifacts and books related to northern indigenous peoples. Mr. TERADA was born in 1933 in Niigata prefecture, and graduated from the department of veterinary, Hokkaido University in 1957. He worked at the Nichiro Fur Co., Ltd. a mink farm in Abashiri as an executive from 1960 to 1993. He had been interested in Ainu Culture and collected a lot of artifacts and books from antique or souvenir shops and used-book stores. He passed away in 2003. Most of his collection was sold and donated to the Hokkaido Museum of Northern Peoples.

1. はじめに：収蔵までの経緯

本稿は、寺田弘氏（故人）が収集し、当館で所蔵することになったアイヌの民具をはじめとする資料（一部整理中・未登録）の紹介である。

寺田氏は1960年に日魯毛皮・網走ミンク飼育場に赴任した頃から、体調を崩す1998年頃まで、以下に詳述するアイヌおよび北方先住民に関する文献と民具を収集してこられた。

寺田氏は当館開館（1991年）来、講座等の行事に熱心に参加され、折に触れ手元に複数お持ちの同様の資料や、特別展等に関する文献・写真等を寄贈・貸与くださっていた。し

* 北海道立北方民族博物館主任学芸員（Hokkaido Museum of Northern Peoples）

キーワード アイヌ民具、寺田弘（周史）、コレクション

Key Words Ainu artifacts, Hiroshi Terada, Collection

かし、まもなく病気が重なってお身体が思うようにならなくなり、所有していた資料の行く末について、筆者らに相談されるようになった。病状やご家庭の事情等で1999年の暮れに市内で転居することとなり、その前に収集品のうちアイヌ関係民具の大部分は当館に寄託し、文献類は譲っていただくべく、同年夏から分類や整理作業を始めた。

まず、民具197点は11月に寄託された。文献類のうち、当館に所蔵されていないもの約900冊を購入した。受託した民具は、平成13～16年度に購入および受贈した。

民具の評価（価格を含む）は、当館資料収集評価委員会で行なった。それに先立ち、筆者が聞き取り調査等を行なったほか、2003年2月に佐々木利和氏（当時・東京国立博物館）に実見していただき、評価に関するアドバイスを得た。

2003年4月、寺田氏は療養中の網走市内の病院で逝去された。その後、寺田氏を支えてこられた登志子夫人と相談しながら整理を進めていたが、夫人も2002年から病床の身となっていて2005年3月に逝去された。同年4月に遺品を整理することになり、北方民族に関係する資料類についてはご遺族やご友人から筆者が処分を任された。

2. 収集者および収集の背景について

寺田弘（ペンネーム／寺田周史）氏は1933年に新潟県水原町（現・阿賀野市）に生まれ、1957年北海道大学獣医学部を卒業後、羽幌町農業共済組合の獣医師として勤務した。その後、実家に呼び戻され、一時新潟県の保健所勤務などをしたが、1960年に日魯漁業株式会社に入社、網走事業所・網走ミンク飼育場の場長となった（後にミンク飼育場は子会社の日魯毛皮（現・ニチロ毛皮）株式会社に所属）。

寺田氏がアイヌをはじめとする民族関係資料を収集し始めたのは、就職後間もない頃とおっしゃっていたように記憶している。そもそもアイヌ文化についての関心は、学生時代から芽生えていたように聞いていたが、詳細はわからない。

寺田氏のコレクションは当館に収められたアイヌや北方民族に関するものだけでなく、本業に関係する毛皮の文献が多数ある。養殖業や獣医学に関するものはもちろん、毛皮文化全般にわたるものであり、古書も多く含まれている。服飾史の研究もされていたため、アイヌの衣類にも関心を持たれたのだろうと思われる。

寺田氏は随筆の中で、コレクションについて以下のように記している。少々長く、また現在では使用しない表現等もあるが、発行部数の限られた文献であり、氏の収集に関する重要な記載と思われるため、引用しておく。

「郷土誌関係に手をつけはじめたのは大分昔のことである。岩波文庫の『ユーカラ』¹⁾が発端となってアイヌや北方民族関係をあつめ出し、更には北方ユーラシアに飛火して、主として民族（俗）、民話、歴史関係の広範に及ぶことになるが、それだけ底も浅くなった。少し目を通すだけで満足に読みもしない本が永年のうちに山となり、書庫をつくってもまだ足りない。置き場に困りながら更に買込むのはどうしたことかわれながらあきれている。・・・（中

略)・・・ いづれにせよいくら高くなったと云っても、中味から云へば本ほど安いものはない。とりわけ文庫本や新書版のその有り難さには云うことはない。

北方資料を求めて古本屋を廻っているうちに、関連してアイヌ絵をはじめ色々な装飾品や民具が目につくようになり、自然とマキリ、ひげべら、厚司、木彫具等いわゆるアイヌ物を手に入れるようになっていた。タマサイや和人との交易品の漆器類は、高価な故もあったが全く興味なく、専ら織物や生活民具が目当てであった。もっともアイヌ玉の方はバラされて帯止めや風鎮になると聞いて、それを惜しんで無理したのが残っている。民具は当時まだ余り省みられず、少なくはあったが比較的安く入手できたものである。鮭の皮でつくった外被や靴など、博物館に納まった以外にはや出ることはないだろうと思っていたが、焼け傷はあったが業者がとっておいてくれた一組を、月賦で手に入れた。

皮に刺繍したギリヤークのポシェットの中に骨の銚が入っていて思わぬおまけがついたこともあった。それは暫くしてジャッカ・ドフニに永久保存のため無期貸付の展示品に入れてもらっている。

アイヌの民俗資料は戦前の早い時期に学者や博物館に蒐集されており、又アイヌの首飾りや刀などは好事家の手を廻るうちにだんだん高いものになっていた。日高方面の現地ではこれぞというものはみな人手に渡り、ズルシャモにたゞかれてたゞ同然に喪失してしまい、今では逆に買戻したいところであろう。現在札幌あたりの古物商に聞くと、まれではあるがまとまったコレクターのものが出るが、眼の飛出そうな価格で、結局はバラバラにされ、交換など堂々巡りをくり返し高価なばかりではぬ品も多く、近頃は巧妙に細工した贋作も少なくないという。

各地その特色をうち出す為にも資料館ばやりの昨今、歴史のない内地移民の世界ではせいぜい土族や屯田兵など特殊な集団移住を売り物にする以外、やはり先住のアイヌ文化の紹介に頼らざるを得ない。それも産地や時代も不明な展示品ながら、あるのはまだよい方である。考証された複製品でさえ急がねば間に合わぬほど時間が経過してしまった。土が保存してくれた石器や土器の考古資料だけはどこにでもあるが、それだけでは絵にならない。

網走市に道立の北方民族資料館をと力を入れて運動している。将来はその施設を利用して論文をものにできる程の充実が望まれる。その為にも資料の集積は広く厚いほどよい。いつできるかわからない建物でもそれがあれば勢がつくし、なければ遠のくのは自明で、今から中味をどうするか系統立てた具体案が望まれる。道の緊縮予算を当てにしても時間が経つばかり、期成会はせめて資料整備の方を自前で努力する必要があるまいか。(後略) (寺田 1986: 171-172)

3. コレクションの全体像とその意義

当館および他機関に所蔵されることになった資料の概要と、その意義について略記する。

<アイヌ民族資料>

全体は約200点で、その大部分はアイヌの衣類および捧酒箸等の儀礼具である。後述するように、製作者などが判明したものはわずかであるが、手の込んだものが少なくない。

<文献類>

・ 1,200冊以上のアイヌをはじめとする北方の先住民族の文化と歴史に関係するもの、北海道の歴史・文化財に関するもの、北洋・日露漁業関連のものを所蔵されていた。そのうち、当館で所蔵している同じ版のものを除き、901冊を平成11年度に購入した。

・ 先住民文化以外では、フィンランドを中心とする北欧関係文献（書籍約130冊、雑誌約60冊）があった。北海道東海大学国際文化学部の伊藤大介教授に相談し、登志子夫人の了解を得て、2003年10月に同大の図書館に寄贈した。

・ ハンガリー関連の文献（『日洪文化』1～16号／1941～44年等含む・約20冊）は、当館の谷本一之館長をとおして、2006年に北海道教育大学に寄贈された。

<絵ハガキおよび写真>

全部で243枚（約30組）あり、うち1960年代以降のものも46枚（6組）含まれるが、大半はそれより古く、観光みやげ用として流通していたものが大部分である。戦前に発行されたと考えられるものもあり、歴史資料としても興味深い。

<スクラップ帳>

1963年から1998年まで、寺田氏の区分で「アイヌ」関連のものが30冊、「北方民族」関連4冊がある。基本的に新聞の切抜きで、朝日新聞・読売新聞・毎日新聞・北海道新聞・北海タイムズと地元の網走新聞等が含まれている。しかし、年月日は記してあるものの、紙名が不明なものも少なくない。雑誌等も若干含む。「北方民族」の冊子には、当館開館前の誘致の経緯等も詳しく、当館にとっても大切な資料といえる。

<毛皮および毛皮製品>

全94点で、2003年2～3月に開催した当館企画展「毛皮 一身をまもる技と心」のため借用していた。展示期間中に、寺田氏の知人であり元北海道大学教授の近藤敬治氏（毛衣多様性研究室主宰）に実現していただき、種の同定や取り扱い等について助言を受けることができた。保管や活用の可能性の点で、当館で所蔵するのは適当と考えられる。

先述のように、寺田コレクションは1960年から1998年頃までに集められたものである。当館のアイヌ民族資料の大部分は網走市立郷土博物館から移管されたもので、戦前から1960年代前半（昭和30年代）までに収集されたものがほとんどである。また、当館の開館後に収集した、現在の工芸家たちが製作したものもあるが、寺田氏のコレクションは収集年代としてはちょうどその間にあると言え、その点でも評価できるだろう。

4. 作者が同定されたアイヌ民族資料

次に、作者が同定できた資料について紹介しておく。寄託資料を購入するにあたり、資料の出所に関する情報収集を試みた。しかし、古物商から購入したものが大部分を占めるうえ、情報を明かさないのである収集家のならわしでもあり、また寺田氏が資料を手放すことを決めた頃には病状も進行して、聞き取りをしようにも記憶の定かでないことが多かった。少ない手がかりをもとに、2001～03年にかけて調査をし、いくつかの証言等を得た。

① 樺太アイヌの衣類

寺田氏の記憶では藤山ハル氏（1900－1974）製作のものが含まれるとのことであった。

樺太アイヌの衣類に関心を持つようになったのは、赴任して間もない頃、網走駅前のみやげ物店に飾られていた「着物」を目にしたのが契機と聞いていた。この店の記憶が曖昧で現在とは異なることから、関係者を特定できていないが、以前交友のあった駅近くの「大広民芸木彫胡峰の店」店主・大廣茂氏夫妻から2001年11月にお話を伺うことができた。同店は1965年頃に駅近くに移転した。寺田氏とともに旧常呂町の製作者を訪ねたこともあり、現在も藤山ハル・金谷フサ（1921-1986）両氏から購入した着物を所有されている。

そこで、樺太アイヌの衣類に関する報告書（北海道教育庁 1987;1988;1989）の執筆者でもある東京大学文学部附属常呂実習施設の宇田川洋教授（当時）に相談し、2001年12月に、コレクションの中から北海道アイヌのものではないと思われる衣類を持参してご自宅に伺い、夫人の宇田川倫氏に実見していただいた。その結果、9点（資料番号H13.54、H13.58~65）を藤山氏・金谷氏らが製作したものであろうと同意していただいた。

②杉村キナラブック氏製作の履物

購入時（昭和46年）の注文受書のついた資料が1点あった。印刷されていた店名から阿寒湖温泉の平商店（現・たいら）にお聞きしたところ、このブドウ蔓製のわらじ（H13.57）は、当時、親戚でもある旭川市の杉村キナラブック氏（1888-1974）がつくったものを販売したと記憶されていた。

③杉村京子氏製作の下紐

旭川市の杉村京子氏（1926-2003）が製作したものも含まれている。平成4年に当館で同氏の講習会を実施した後、寺田氏は所蔵していた刀掛帯の修理を依頼した。後に謝礼を送ったところ、杉村氏はお守り代わりにと2点の下紐（H13.55、H13.56）を作ってあげたという。寺田氏から聞き取り、2002年3月に杉村氏本人にも確認している。

④旭川の木製小物入れ

製作者の特定できたもう1点が木製の小物入れである（H13.53）。舟形の鉢（いわゆるニマ）風の木彫りの上にアイヌの家屋（チセ）が付いていて、屋根部分が蓋に、家の中は割りぬかれて物入れとなっている。裏には「オタル・ロータリー」の焼印と「旭川アイヌアサ作」の線刻がある。小樽ロータリークラブに照会したが、残念ながら情報は得られなかった。一方の作者については、旭川市の木彫家・平塚賢智氏にお聞きしたところ、川村浅次郎氏の作品であろうとの判断であった。川村氏は満洲に出兵し、復員後まもなく他界したので、戦前の作品と考えられるとのことである。

平成13年度に購入した上記の資料以外は、今のところ製作者に関する情報はない。写真およびデータは当館『資料目録7』を参照されたい（北海道立北方民族博物館 2003）。

5. まとめにかえて

本稿は、寺田弘氏収集資料の概要と同氏がこれらを収集された背景について、わずかな

情報を集めたに過ぎない。民具の殆どはバックデータを持たず、今後の調査の手がかりは少ない。しかし、各種の展示図録や資料目録等と比して、他館にもあまり収蔵されていないような珍しい資料も含まれている。これらは、公開により新たな情報が寄せられる可能性を持っていると考える。近いうちに未整理のものも調べなおし、稿を改めて紹介したい。

謝辞

寺田氏所蔵資料の当館への譲渡にあたっては、寺田弘氏・登志子氏のご遺族やご友人から多大なご理解とご協力を得た。また、本稿をまとめるにあたっては、宇田川洋氏、宇田川倫氏、大廣茂氏、近藤敬治氏、佐々木利和氏、平塚賢智氏をはじめ、多くの方々にご協力いただいた。記して感謝する次第である。

注1) 岩波文庫の『ユーカラ』は初版が1936年で、寺田氏がそれを最初に読んだのがいつかは不明である。蔵書には、古書店から購入した昭和14年発行の第4刷が含まれていた。ちなみに新聞スクラップの最も古いものが、1963年1月3日付け北海道新聞の連載「ユーカラ・北海道と私①金田一京助氏に聞く」であり、金田一の著作は30冊以上お持ちであった。

参考文献

寺田周史

1977 『毛皮 その種類と背景』 舟蕃社：東京

1986 「見果てぬ夢」『文芸網走』9号：170-175, 文芸網走：網走

2005 『うばらない夜話 寺田周史遺稿集』（寺田澄史編） 舟蕃社：東京

北海道教育庁社会教育部文化課編（萩中美枝・畠山歌子・金谷フサ・宇田川洋・宇田川倫筆）

1987 『昭和61年度アイヌ衣服調査報告書（Ⅱ）一樺太アイヌが伝承する衣文化1ー』
北海道教育委員会：札幌

北海道教育庁社会教育部文化課編（萩中美枝・畠山歌子・宇田川洋・宇田川倫筆）

1988 『昭和62年度アイヌ衣服調査報告書（Ⅲ）一樺太アイヌが伝承する衣文化2ー』
北海道教育委員会：札幌

1989 『昭和63年度アイヌ衣服調査報告書（Ⅳ）一樺太アイヌが伝承する衣文化3ー』
北海道教育委員会：札幌

北海道立北方民族博物館編

2003 『北海道立北方民族博物館資料目録7 民族資料目録4 ～平成12・13・14年度、
網走市寄贈資料～』 北海道立北方民族博物館：網走